

[特集] 青年期・成人期の余暇と発達

特集にあたって

田中良三

日本語で「余暇」という言葉が与える印象は、生活上の「ゆとり」とか「ぜいたく」である。

そもそも、「余暇」とは、どういう意味なのだろうか。余暇という言葉は、少なくとも、庶民の生活の中から生まれた言葉であるとは思えない。ある外来語に、「余暇」という言葉をあてたのであろう。英語の *leisure* が、それにあたる。ブリタニカ国際大百科事典の小項目事典では、「個人が職業活動や家事、その他の社会的拘束から解放されたときに休息や気晴らし、自己能力の開発、社会参加、創造性の発揮のために行う随意的、自発的な活動の総体。社会的に拘束された時間および睡眠、食事などの生理的必需時間の残りの自由な時間という意味で、時間的な概念として『余暇』という訳語があてられる」と解説している。

今日、「レジャー」という外来語の方が、「余暇」という言葉よりもむしろ私たちの日常生活に定着している。しかし、それは、もっぱら余暇におけるスポーツなど特定の遊びの分野を指しているのだから、*leisure* に較べて「レジャー」の意味はきわめて狭い。したがって、余暇という訳語に代えてレジャーという外来語をあてることも適切とはいえない。

本特集に収録された「余暇」に関する各論文を、とりあえず、英語本来の意味であるこのレジャーについての解説を参考にして読むと、その全体像がつかみやすい。

総論としての丸山論文は、豊かな余暇をもつことは、障害者の権利であるという観点から、余暇

活動の幅の狭さ、余暇についての家族依存、余暇活動の質に目を向けること、余暇活動に参加する本人の思いに着目すること、消費と深く結びついた余暇への批判的視点をもつこと、余暇活動の拠点を確立していくことについて、先行研究を踏まえながらその全体的状況を捉え、これからの課題について問題提起をしている。

山崎論文は、障害者社会教育の国際動向や歴史的経緯を述べ、とくに、障害者青年学級と今後の障害者社会教育の方向性を示唆するものとして、オープンカレッジや「福祉型専攻科」などの取り組みに着目している。

土岐論文は、「学習の場としての活動」（演劇）と「趣味や関心に基づく自主的な活動」（吹奏楽団、登山サークル）という集団的に組織された余暇活動を経て「自己の育ち」を語る青年の姿を考察している。

また、実践報告は、近藤さんの放課後活動の発展としての青年・成人期の余暇活動について、南さんの肢体不自由の青年たちの人形劇活動について、高木さんの障害青年・成人たち自身によるサークル活動について、ケアホームもやい職員集団のグループホームの重度知的障害者の余暇の取り組みについてである。これらはすべて、実践の場から障害者の余暇に取り組んだもので、意欲に溢れている。

障害者の生涯にわたる人間的な生活と発達の保障のための余暇支援の在り方について、今後、さらに、その実践と理論の発展が望まれる。

(あいち発達障がい研究所 たなか りょうぞう)